中高生のための『ムーンライト』レクチャー テキスト全文

林 立騎

みなさん、こんにちは。林と申します。ご紹介のとおり、今日は沖縄の那覇から来ました。今は昨年 10 月末に那覇にオープンした「那覇文化芸術劇場なはーと」という劇場でさまざまなプロジェクトを企画し、実施する責任者をしています。その前はドイツの劇場で 3 年ほど働いていました。さらにその前は、やっぱり那覇に住みながらいくつかの仕事をしていて、その頃に京都に通って、今回の『ムーンライト』という作品に関わらせてもらいました。それがこの作品の初演、2018 年の 12 月のことだったと思います。

今日は作品を見る前の 30 分ほどの「事前レクチャー」です。プレレクチャーとかプレトークは、わたしの働いていたドイツの公共劇場では、とても多かったです。だいたいはアーティストではなく、劇場のスタッフ、その公演の担当者が、作品が生まれた背景を説明したり、作品理解につながるような知識や見るときのポイントを伝達します。ドイツは言葉が大切な国なので、言葉を仕入れてから作品を見るわけです。ドイツの場合は、内容やテーマそのものよりも、そのテーマにいかにアプローチするかに演劇の比重がかかることが多いので、事前に話を聞くとネタバレになってしまうというようなことは言われません。ただわたしとしても、このあと作品を見ることが答え合わせになってしまうようなことは避けたいと思います。

今回、なにをお話しようかと、那覇で考えて、原稿をつくって、札幌に持ってきました。ところが、木曜の夜にこちらに着いて、1 時間ほど稽古を見たら、わたしの知っていた作品とはまるで別の作品になっていました。それはとても楽しい驚きだったのですが、他方で、那覇で準備した原稿はまるで使えないと思って、とても困りました。作品が上演される前にあまりに関係ないことを話すのは、作品にとっても、みなさんやわたし自身にとってもよくないことだと思うからです。稽古を見ながら、お話できそうなことをあらためて考え直したのですが、30 分もかからずに終わってしまうかもしれません。当初は、こちらのスクリーンにパワーポイントでスライドを映しながらお話しようかとも思っていたのですが、この立派な会場を見せていただき、この場所が隣のカフェや図書館とつながっていて、向こうの共用部分を歩くひともとても多くて、そんな中であやしげな勧誘セミナーみたいに見えたら申し訳ないので、作品の広報画像を出しておくだけにさせてもらって、あとはただ普通にお話をしようと思います。

村川さんのこれまでの作品については、お手元にある小さな冊子を読んでいただければと思います。この冊子は、今回の『ムーンライト』が 2020 年にフェスティバル／トーキョーという東京の演劇祭で再演されたときに、わたしが編集してつくりました。もともとは

作品が上演される時期にドイツから東京に合流するはずだったのですが、新型コロナウイルスの影響で帰国できなくなり、ドイツの自宅で村川さんの過去作品を映像でたくさん見て、つくりました。お時間あるときにこれをゆっくり見ていただければ、村川さんがどんな姿勢でどのような作品をつくってきたのか、ある程度はわかっていただけるのではないかと思います。京都初演時の『ムーンライト』のことも、この冊子の中に書かれています。

また、今日このあと見ていただく上演については、こう言っては身も蓋もないように思われるかもしれませんが、見ていただければそれだけでいい作品ですし、わたしはとても面白いと思うので、まずは楽しんでくださいとしか言いようがありません。わたしとしては、今日この作品を見たあとに、わたしも含めたわたしたち観客が、それぞれどんな気持ちや感覚になるのかについてとても興味がありますが、それを今から考えすぎることは避けたいと思います。なので、今はもう少し別のことをお話したいと思います。

今回、このレクチャーは「中高生のための」レクチャーと題されています。実際には何歳の方に来ていただいても大丈夫なのですが、どうしてそんなタイトルというか、どうして中高生の方とお話したいと思ったのかということから、少し遠回りですが、はじめたいと思います。実は今回、初めて札幌に来たのですが、那覇とは比べものにならないくらい大きな大都会で、この施設の中にも、勉強をしている高校生らしき人たちがとてもたくさんいらっしゃいますね。都会というのは、勉強をしている若い人がたくさんいる場所なのだなと思いました。わたしは大学と仕事で 15 年ほど東京に住んでいたのですが、ここ数年は沖縄やドイツにいて、そういう都会の現実をすっかり忘れていました。

さて、今思うと、わたしは中高生の方に自分からなにかを伝えたいというよりも、もし中学生や高校生がこの『ムーンライト』という作品を見に来てくれるなら、演劇に対してどんなことを期待して来るのだろうか、演劇になにを求めて来てくれるのだろうか、それをこちらから聞いてみたい、という好奇心のようなものがあったのだと思います。もしここに中高生だったり、18 歳とか、19 歳とか、のくらいの年齢の方がいらっしゃったら、突然ですが教えてもらえないでしょうか？わたしも演劇についてなにを知っているわけでもないので、特別な応答もできないのですが、村川さんのこれまでの作品や、とりわけ今回の札幌の稽古を見て思ったのは、こういうことです。少し唐突に思われるかもしれませんが、たとえば、今ここまでわたしが話してきたことがすべて嘘だったら、あるいは、これから話すことがすべて嘘なら、なにが変わり、なにが変わらないでしょうか？ 那覇から来たとか、ドイツにいたとか、村川さんの冊子をつくったとか、東京に住んでいたとか、それがすべて嘘だったら、みなさんにとって、あるいはそれを話しているわたし自身に、どんな影響があるでしょうか、ないでしょうか？ わたしが普段は沖縄で働いているということがもし嘘でも、それほど影響はないかもしれません。ドイツの劇場では事前レクチャ

ーが多いということが嘘なら、間違った知識を広めるという意味で、少し問題があるのかもしれません。

今回、村川さんの『ムーンライト』の稽古を見て、わたしがあらためて思ったのは、わたしたちは普段、無限に多くのことをなにも疑わず、意識もせずに信じながら生きている、ということでした。作品を見る前にそんなこと言われても、なんのことかわからないと思いますが、こういうことは作品と関係があるようで実はそんなにないので、気にせず聞いてもらえるとうれしいです。誤解していただきたくないのは、わたしは、わたしたちが無限に多くのことを疑わず、信じながら生きているということ自体を悪いことだと思っているわけではなくて、なんでも疑わなければならないというようなことを言いたいわけではないということです。ただ、なにも疑わずに聞いてきたこと、日々聞いていることがもしも嘘だったとしたら、あるいは嘘かもしれないし本当かもしれず、それがわからなくなってしまったときには、なにが変わってしまい、消えてしまい、なにが変わらずに残るだろうか、と思います。日本の人口が 1 億 2 千万人であるとか、沖縄には日本中にある米軍基地の 70%以上が集中しているということが嘘だったらどうでしょうか。毎日のニュースがすべてつくられたものだったとしても、もしかすると日常レベルではほとんどなにも変わらないのかもしれません。あるいは今わたしが話していることが、わたしが考えて書いたことでは全然なくて、誰か別のひとが書いた原稿を読み上げているだけだったら、なにかが変わってしまうでしょうか？ フェイクニュースという言葉が使われるようになりましたが、今は日々の情報や言葉が多くて、その大半が嘘か本当か本当はわからない、そのときわたしたちは一体どうすればいいのか、結局はなにが残り、なにを支えにすればいいのかわからないというとまどいが、自分の中にもありますし、世間にも広がっているのかもしれないと、作品から少し離れたところで思います。

演劇といういとなみは、一般的には、作者がつくった架空の話を舞台上で上演するものだと理解されていて、その意味では嘘を語るものであり、しかしその嘘の中に事実ではないかもしれないけれど、なにかしらの真実が含まれるものとして、尊重されているのではないかと思います。しかし演劇は必ずしも最初から嘘がベースにあるわけではありませんでした。2500 年前に書かれたギリシア悲劇には直近の過去に起きた戦争を描いた作品がありますし、日本のお能、謡曲にも、歴史的な出来事や人物を中心に据えた作品があるかと思います。わたしは文化の歴史に疎いので、正確なことをお話できないのが申し訳ないですが、ドキュメンタリーかフィクションか、という区分けは、たとえばプライベートとパブリック、公私の区別と同じように、ある特定の時代から生まれたもので、つねに厳密に区別されてきたわけではなく、またその区別を用いたとしても、厳密に線を引いてどちらかに仕分けることは、本当はなかなかできないのではないかと思います。

しかしそれでも、あれかこれか、ドキュメンタリーかフィクションかという判断基準をすでに刷り込まれてしまっている、ある程度信じざるをえなくなっているのが現代のわたしたちだと思います。そのときに、もしこのすべてが嘘だとしても残るものはなにか、ということを、感じ取ったり、考えたりすることは大切なのではないかと、村川さんの稽古を見て、わたしは思いました。同時に、もしすべてが嘘だったら、こんな言葉、こんな声、こんな表現が出てくるはずはない、やっぱりこのすべてが嘘ということはありえない、という感覚や知覚を、自分自身の中に、それでもなお信じることのできるものとして持つことができるだろうか、ということも考えました。みなさんは、これは絶対に嘘ではない、このひとのこの言葉は、声は、嘘のはずがないという確信を、自分や自分以外の誰かに対して持つことがあるでしょうか？ そしてそういうことがもしあるとしたら、それはよいことでしょうか、うれしいことでしょうか、あるいはもしかすると恐ろしいことだったり、残酷なことだったりするでしょうか？

少し具体性がないままに言い過ぎてしまった気がします。わたしがお話したいと思ったのは、演劇のことでした。あるいは演劇と現実の関係のことでした。演劇は嘘だけど、そこに真実が含まれているからすばらしい、というふうには、わたしはあまり思っていません。また逆に、演劇はひとが書き、生身の身体で演じるものだから、そのすべてが現実と地続きである、というのも、少し極端な考え方のように思います。そのどちらでもなく、もう少し根本的というか、基本的な部分で、演劇は現実というものを捉えなおすための鏡のようなはたらきをもっているのかもしれない、ということです。

現実とは一体なんなのか、あのとき現実にはなにが起きていたのか、現実に今ここでなにが起きているのか、この現実にはどういうことが起きる可能性が含まれているのかを、日常的な常識のレベルから少し離れて、揺さぶって、からだとこころに現実の別の見方や感じ方を開いてくれる可能性を、演劇はもっているのではないかということです。そんなことを、『ムーンライト』の稽古場で考えていました。すでにご存知の方も多いかもしれませんが、『ムーンライト』は、演出の村川さんが京都在住の中島昭夫さんという方と出会って作った作品でした。中島さんは札幌にも来る予定でしたが、昨年お亡くなりになりました。今日は中島さんがいなくなって、京都や東京とはちがうかたちで、作品が上演されます。

演劇という表現は、昔から、死んだひとたちや目に見えない存在と深いつながりをもっていて、神話上の英雄や神様や死者があらわれることは多いのですが、今日は生前の中島さんを、たとえば俳優さんが演技で表現するわけではありません。中島さんはいないままです。

ふつう演劇は、出演者の身体や声が目の前にあるということをその第一の特徴とすると思うのですが、今回の稽古を見ている中で、むしろそれ以前に、沈黙や不在を前提とするのが演劇なのではないか、あるいは、沈黙や不在こそが演劇なのではないかと、わたしは考えさせられました。そしてまた実際、村川さんと作品に関わるチームのみなさんは、声を聞かせ、身体を見せるというよりも、そこにないものがそこにあらわれるように、そこに聞こえないものがそこに聞こえるかもしれないように、丁寧な作業を、なにかをさがしつづけるような作業を積み重ねていたように思います。それは必ずしも「亡くなった中島さん」ということに限らず、そこにいない誰か、なにかにつながる、そこに聞こえないのに思い出すということが、わたしたち観客一人ひとりの辿ってきた人生とともに起きるかもしれません。演劇づくりがそういう場所をつくる作業であるように感じられました。

わたしたち観客は、ふだん、観客席で沈黙したまま座っていて、そこにいるのに舞台との関係ではまるで不在のように扱われます。このことをただの決まりごととしてではなく、もっと本質的な、演劇という表現が求めているなにかとの関係で考えることができそうな気がしました。つまり、演劇においては、観客席では、そこでなにかいつもとはちがう沈黙を経験したり、自分自身が存在しながら不在になる、他のひとたちとともに不在になる特別な質感があるからこそ、なにかを受け取る、もしくは自分自身の方からなにかを差し出す可能性さえあるのではないか、ということを思いました。

今回の『ムーンライト』という作品は、不在のまわりに丁寧に光を当て、沈黙を声と音楽で縁取ります。そうすることでわたしたちは、日々大量に流れ込む音声や、大量にあふれるモノだらけの現代社会の中で、ここには聞こえない声や、ここには来ていない、来ることができないひとや、ここにない存在の方へと、感覚やこころを少しだけかたむける時間をもつことができるのではないかと思います。わたしたちの現実は、聞こえる声と存在するモノだけでできているのではなく、聞こえない声や、なくなってしまったものがあるということ、ここに来ているひとだけでなく、ここに決して来ないひとともつながれるかもしれないということは、当たり前ですが、当たり前のことに一周回って気付けるのは、芸術のいいところです。

さて、もう一つだけ全然ちがう話をして終わりたいと思います。わたしの働いている那覇の劇場は、劇場だけの建物で、住宅や小さな店舗がたくさんある地域に建っていて、ここのようにいわゆる複合施設の中に入っているわけではありません。今回あらためて思ったのですが、複合施設の中に劇場があることは、とてもいいところと、少し難しいところがあります。とてもいいのは、たくさんの知らないひとがつねにそこに混じり合っていて、なんというか、少しさみしかったり、無力感みたいなものも感じるけれども、それがこの都市のまぎれもない一側面なのだろうと実感できるところです。小さなまちから来たわた

しとしては、大きな吹き抜けに自分の存在が吸い上げられて消えてしまいそうに感じられて、大都会なんだなとあらためて驚きます。一方で、劇場で働いている立場から少し難しく感じられるのは、これはもちろん飽くまで個人的な印象に過ぎませんが、ここが劇場だという感じはどうしても薄まるので、この巨大で圧倒的な都市の現実の中で、劇場になにができるのかを考えるのは簡単ではなさそうだということでした。しかし、複合施設という現代的な形態の中で古くから続いてきた劇場や舞台芸術の積み上げをどのように活かすことができるかという課題の方がむしろ重要だし、チャレンジングなように思います。

歴史的に考えると、劇場というのは、なにかを鑑賞して、ただ帰る、所有できない無形のものを消費してしまうだけの場ではなかったし、今もそうではないように思います。よく使われる言葉で言えば、劇場とは、そこに集う「わたしたち」がつくられる場所である、ということですね。劇場に集まることで、今わたしたちはこうして「わたしたち」になっています。その「わたしたち」のつくり方や、あるいはむしろ「わたしたち」を少しずらしたり、日常とは異なる「わたしたち」を試したり、今ここにいない誰かや、別の時代とつながる「わたしたち」を求めたり、場合によっては普段の「わたしたち」をバラバラに解体するような作業に、舞台芸術のアーティストたちは知恵と工夫をこらしてきたのではないかと思います。

今日の『ムーンライト』がどのような「わたしたち」の感覚を、わたしたち観客一人ひとりの身体や意識にもたらすのかということも、一つの視点になるのかなと思います。このあとの上演を見たときに、わたしたち一人ひとりがなにを感じ、考え、思い出すのかはまだわかりません。作品をつくった村川さんにとってさえ、それは同じだと思います。今回の作品は、亡くなった中島さんを俳優が演じることで、観客であるみなさんに近づけようとする作品ではありません。むしろ、いなくなってしまった中島さんと、離れたままで出会う、ということを試みる作品だと思います。離れてしまったひとを、もう一度近づけようとするのではなく、距離を隔てたままで出会う、離れてしまっているままで関わり合うということが、できるのかどうか。これは死者や亡霊というかたちで演劇が古くから扱ってきた普遍的な問題であると同時に、とても現代的な問題でもあると思います。問題は、死んでしまったひとということに限られないように思います。そばにいない、離れた誰か、なにかと、離れたままで関わり合うということを、どんなふうに試みることができるのか、ということです。

たとえば、わたしはそれでいいと思っているのですが、今日の上演のあと、観客同士で感想を話し合う場のようなものはありません。一つの劇場で、隣同士の席に座っていても、わたしたちは隔てられていて、離れたままです。今も隣のカフェや図書館、目の前の通路にはたくさんの知らないひとたちがいます。だからといって、みんなつながればいい、作

品を見た観客同士も誰もが感想を話し合ったり、意見を交換したり、できるだけ多くのものを共有すればいいのでしょうか。なにかがよくなるでしょうか。わたしはそういう作業を決して否定できませんし、むしろ普段は沖縄でわりとそういうことをたくさんしているのですが、コミュニケーションし、共有し、距離を縮めようとすることで、得られるものと、失われるものがあると思います。コミュニケーションや共有は、現代ではとても価値が高いとされているので、コミュニケーションや共有をしてしまうと失われるものもあるかもしれないという考え方は、今の世の中ではほとんど気にも留められていないと思います。しかしひとの話を素直に聞いてしまったり、自分の考えの中からひとに通じやすい部分だけを離陸させてしまうことで、失われてしまうものも確実にあると思います。あるいは、コミュニケーションする方がいいことだ、他人と共有できる考えをもっている方が優れた人間だと思ってしまう、自然に思わされてしまう、信じてしまう中で、自分だけが一人でずっと大切に守ることのできる秘密のようなものを育てる可能性が奪われてしまうということもあるのではないでしょうか。なので、わたしとしては、今日に限らず、なにか作品を見たあとに、どうしても誰にも感想を話したくないときは、どんなに聞かれても決して話さない方がいいのではないかと、自戒を込めてご提案しておきたいと思います。だからといって、今の世界で本当に一人ひとりの人間がばらばらなままでいいとも、わたしには思われません。そうしたときに演劇は、劇場は、今も面白い位置にあると思います。

舞台芸術を鑑賞するとき、わたしたちは一つの場所に指定された時間に集まって、上演の、作品の一部になります。同じ一つの空間をつくるのですから、わたしたち観客も作品の一部です。しかしだからといって全員が同じ目的をもってそこに集まっているわけではないし、終演後に同じ感想をもつわけでもありません。『ムーンライト』のような作品は一つのテーブルのようなもので、わたしたちはそこに集いますが、作品があいだにはさまっているので、わたしたちは決して近づいて一緒になることができません。互いに直接的なコミュニケーションもできません。作品のおかげでわたしたちは集まり、互いになにかほんの少しの関係をもつのですが、同時に作品の受け止め方もきっとそれぞれにちがうので、実は作品によって切り離されてさえいます。演劇は、あるいは劇場は、一つにまとまることなく集まること、直接コミュニケーションしないままに関係すること、見知らぬひとと離れたままで関わり合うことについて、歴史的にも現代においても、まだまだいろいろな可能性を秘めていると思います。

わたしとしては、『ムーンライト』という作品を見ながら、舞台上に、あるいは自分自身になにが起きているのかを大切にすると同時に、まわりの他の観客の方たちと
のあいだにもなにかが起きるのかどうか、あるいは見終わったあとにそういうことがあるのか、たとえばあの長いエスカレーターを降りて帰るときに、この施設に他の目的で来ているひとたちや、勉強している高校生たちの見え方が変わるのか、もしくは全然変わらな

いのか、そういうことも気にしてみたいなと思っています。すべてが言葉足らずな感じですが、今回の『ムーンライト』の稽古を見ながら、作品を見る前にお話しようかなと考えたのは、このようなことでした。最初に那覇で準備していた原稿とまったくちがう内容になりましたが、結果として、もともとこういうことを札幌の中学生や高校生のみなさんと話してみたい、そして村川さんの作品を見てほしいと、なんとなく考えていたというか、予感していたことを正直に言えたような気もします。

このくらいで終わりにさせていただこうと思います。一体これはなんの話だったのだろうという方もいらっしゃるかと思いますが、ご容赦ください。もし、あまりにも意味がわからないので、原稿で読みたいという方がいたら、よろこんで提供いたします。それと、わたしの話はともかく、今回のように事前レクチャーがあり、公演があり、さらに月曜日の夜に劇評講座を開講するという流れは、作品を鑑賞物として消費しようとしない、すばらしい姿勢だと思います。もし申し込みがまだの方がいたら、佐々木敦さんの劇評講座の受講や聴講もぜひともご検討ください。最後になりますが、今回このような機会をつくってくださった制作の丸田さんと、劇場・財団のみなさんにあらためて感謝を申し上げます。今日はこんなつたない話にご来場いただき、どうもありがとうございました。このあとの上演を、どうぞお楽しみください。

（2022 年 5 月 28 日 29 日 中高生のための『ムーンライト』レクチャー 林立騎）